「茶旅」
“こぼればなし”

(19) ラオスと中国　国境もなく茶葉が動く場所

コラムニスト　須賀　努

今年なって既に2回、ラオスに行った。しかも2回ともほぼ同じ場所であり、それは中国の国境にほど近いポンサリーとその付近であった。ただ1回目はタイ国境から、2回目は中国国境から入ったが、外国人にとってはとても遠い場所だった。バスで行っても、車で行っても10数時間はかかるのだ。おまけに道は平たんではなく、舗装も万全ではない山道。その疲労たるや、ご想像頂けるだろうか？

そうまでして、そこを訪ねた理由はズバリ、茶畑があるから。しかもその茶葉が高値で取引されていると聞き、一体どんなお茶なのか、この目で確かめてみたくなった次第。疲れたと言っても単なる物好きなだけなのだが、そんなに苦労していったのに、1回目の2月は、『茶葉はもうない』と一言で片づけられてしまい、『4月に来れば新茶があるかもしれない』という微かな望みを胸に2回目に挑んだわけである。

2回目はポンサリーという街ではなく、直接茶畑のある烏太と呼ばれる場所に出向いた。ただその烏太から、茶作りをしている村まで車が入れず、何と炎天下を5㎞も歩く羽目になった。何とか着いたその村ではまさに茶作り真っ最中で、生葉が運び込まれ、干されていた。夕方まで摘み取り、鍋で炒める作業は夜、暗い中で行われていたのだが、それはまるで1つの儀式のように厳かで、かつ迫力満点だった。

村の村長が自らお茶を淹れてくれ、話を聞いていたのだが、いつの間にか彼の姿が見えなくなり、探してみると、運び込まれた生葉を計量していた。これが村長の仕事か、と目を離した隙に？彼は本当にいなくなってしまった。村人に聞くと『村長は中国に茶葉を売りに行ったよ』とこともなげに言う。

すでに日が暮れようとしている夕方、隣の国まで行くのは余程重要なことなのだろうと思っていたが、実はバイクで15㎞行けば国境を越えて中国に入れるというのだ。午後中国人茶商から中国携帯に電話があれば、その日のうちに茶葉は国境を越えて届けられる。そんな宅配便のようなことが目の前で起こっていた。前述の通り、我々は車で10数時間、距離にして400㎞近くを走ってきたのに、なぜ彼は15㎞で国境を越えられるのか。

そこにはイミグレーションなどなく出入国などと言う概念もない、ということが後でわかった。同時にしみじみ思ったのは、烏太と中国雲南省は殆ど一体であり、元々山伝いに同じ地域だったということだ。因みに正式の国境があっても中国-ラオス間の取り決めで、両国人のみ通行可能という場所が沢山あり、我々は大きく迂回を余儀なくされたのだった。

茶葉を計量する村長　その後中国へ

そこで作られている茶葉は一体どんなものだろうか。葉は大葉種もあれば、小葉種もある。それを天日で干し、釜で炒ってから、揉捻していた。ここでは緑茶と呼ばれていたが、何だか普洱茶の原料を作っているようにも見えた。飲んでみるとミャンマー山中でもよく作られている緑茶、半年か1年後に飲むと美味しいだろうと思われるタイプだった。

雲南省では普洱茶の原料が不足している。特に古茶樹と呼ばれる古い木の葉が珍重されているが、ラオスにはそれが沢山あったのだ。だから、経済力が強くなり、欲しいものは金で買う国から注文が殺到したわけだ。翌日ポンサリー郊外の茶畑のある村へ行くと、そこには雲南省西双版納から車で茶葉を買い付けに来た中国人がいた。車で5時間あればここまで来られると言い、顧客の注文に応じて、茶葉を買い集め、その日のうちに西双版納に戻るという。またこの村には中国人が投資して作った茶工場まであった。ここで作って、広東省に持ち込むと価格が10倍近くなるとの話であった。

やはり今気になっているのが、雲南省産古茶樹の葉から作られたと言って売られているものの中に、このラオス産の葉が入っているのではないかということ。見た目では分り難いし、そもそも同じような土壌で作られているので、素人目に分らないだろう。そこが中国商人の儲けどころとなっているようにも思われる。

実はその後雲南省の易武から少し入った茶畑も訪ねたのだが、そこには清代に入植した漢族の村もあり、そこで作られたお茶は、茶馬古道を通じて、チベットや北京へも運ばれたが、その多くはこのラオスルートからゴールデントライアングルへ向かったと聞き、妙に納得してしまった。運ばれたのは茶葉だけだろうか？そんな疑問は胸の内に秘めた。

（すが　つとむ）